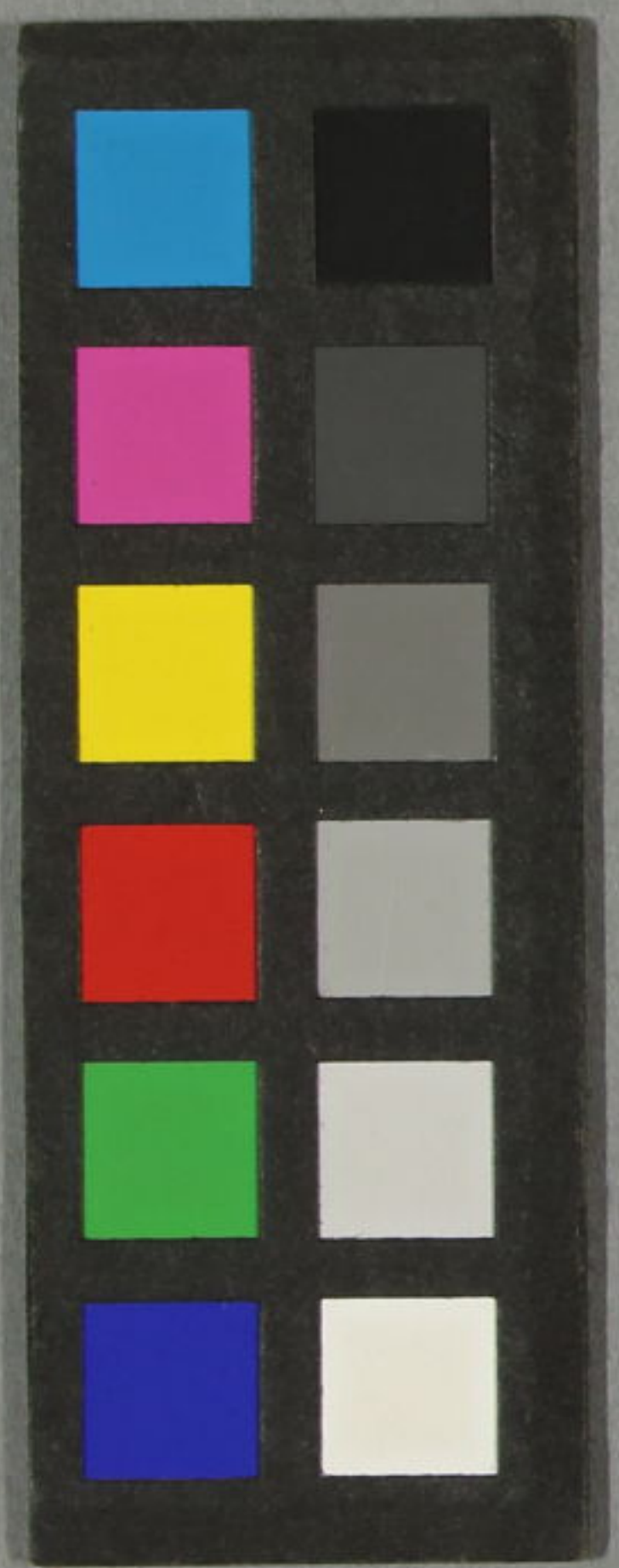
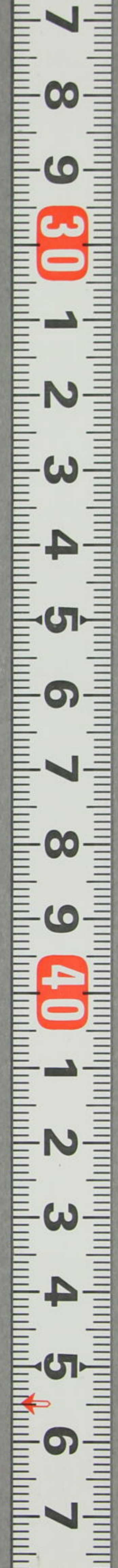


真角叢句集

上

~ 5
5626
1

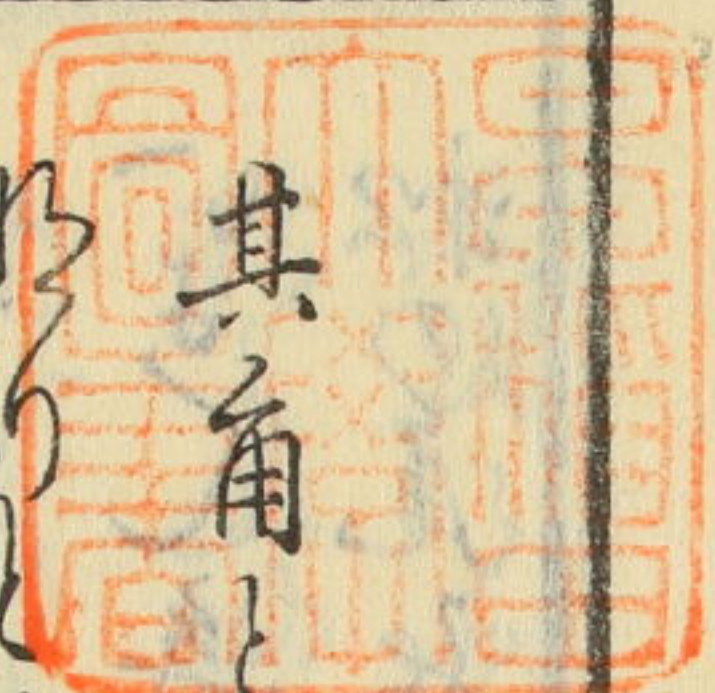


5626
1

其角叢 句集 二冊

書林 金養堂

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈



其角と嵐雪とを菴中の藁とす
那りと蕉翁の稱し中々純く天下の
桃李としく公門子存との公忠を心
とんちんかしの礼と此ありハ一雙の
名家めして世人も人丸赤ん丸やう尔
はあれたまはとこれ中めをいさし勝
劣ハあまのめは阿とる海持とく

鼠雪ハ風雅子禅味哉うひく無門乃
江ハ清き水なりゆく世理能ふあそひ
子里独歩此筆性而紫晋子ハ志学の
年と重功とつゝ身はくちの味ハ
既子次韻の作者身ゆれと進たりかく
誓古の心あつまう人に酔郷亦入ん
いよく奇蹟人哉おろそか乃つゝ
松の尾形神志助阿蘇守也こやとも

序
一

人哉以て身をまよひしとらんしやうに人の心
おろそかなり妙を身呈れさし嵐を
下にまよひ事つらうらん何る人まよひ
此れ定家卿ありと賞言しさるや
中ハ此人亦及んんと本末もぬの川きぬ
すんく洞達能中亦ほそそありて句
ゆめ自在とほくもり誰の人と世に歌
まの何れもや此れ後句集紙板子刺に

懐子の書に計に子ら公作く
こころ学者の便あるを以て書を
事つて臨流求先賢をうやまへ
細を好む筆此書と何たるをた
ら子右尺竿頭子安紙す契入と連

随齋成美序



其角叢句集

春之部

坂窩久威考訂

日の暮るはささるる子鶴乃何処と哉
鏡ひらの責れぬ日ハた〜江戸の春
霍さるる阿達歌例生〜子〜能く

題黄金

目々々々寸一力牧孤涕代書人書
世の中然采螺も鼻をぬのは歌
松のさる伊勢の家可久人書誰

神の町年居紙うわして
 あひの松もかこそ記事あり
 舟をいふや家中此礼を星月来
 明る夜乃ほのろ子うまし 姫おき
 元日や月えぬ人共 橋此か
 元日の岸を夢十乃指く後
 とる子やあめ時を裏四天王
 手握蘭口含雜舌
 田川の松や口子かこそて筆は
 海を記分野是あ春の物語

言の抄傳のいそ松茂十郎今万葉事ため
 こよひうれししりあうをいへん連歌子
 つよまのうれよ此松ハ枝葉百間あり
 諸木系こころは是を在依証なり
 逢葉能事うたててく曾根の松
 蓬葉の讃
 鳴るそと信三の書院乃かや水
 庭電牛も報奏をうたりも
 春王正月光
 生死をいふもの 男はく水いふ

志々々〜記友子

二つ〜有も女房のせんふ〜祝ひ
みゆき 松と恵のそとやう涼しきよ

福祿壽の賛

長き〜年終ほ〜乳法所
〜山夏や額年終の扇〜孝
宝引の地牛の角をた〜也

宝引の讚

保昌〜ち〜ひく形を胸あ〜
衆鼠入腹の夢をひ〜て

上二

引つ〜松と〜荒のま

大根画讚

兵丸 妙の〜ゆ〜り子〜那
松の休やまの〜ま〜ゆ〜く
若さ〜し告〜尾上の畚あ〜し
帯もぬ〜神代あ〜し 踏歌宴
軽子帯かき〜り帳の三枚目

十一日

汁子と 還嫌 床終たの〜
大黒屋〜と〜中〜と〜持送〜

春神子持せん口ぬく小櫃の那
漸覚春相泣との子切句
削りきき膏茶ぬり此鼻子ぬれ
景清々世帯のいさぬや二斗
百人きき雪かきき志のし茶ぬり
さしききも龍糸白くぬれたるの那
七種やぬぬ子聲のまききり
あききき臨身うあき朝あきす
さしききひれ七種打身ぬれたる
砂粒きき水茶ぬれたる初茶

上三

二人静かかききも乃乃
なつてか扇あつたぬぬあつた
うろこ花あつたふ里のぬぬの茶
畠うろこぬぬあつたうろこ茶
傘持てつてつてひあつた若茶
長嘯の記をぬぬひぬぬ
おひぬぬるらんとぬぬ子茶
茶つてらぬぬ白魚ぬぬ吉野川
河州ハ尾娘をぬぬ
うろこひぬぬの茶ぬぬ茶

溪邊雙白鷺

あふ雪の 芥梳る あつまこ那

萬葉集よりも朱雀の柳と侍り

あつまこ那と

たひつこ西の禿アなあつまこ

正月廿日冠里公未侍

業刻の上手を握る 蕨の春

新三十二間堂

あつまこやまきあつまこ

あつまこの四判ハ東より 美子の間

春枕のかるく能者のよとほり守
ちくろ川春ゆく水や 鮫の髓

四十の賀しあつまこ

は秘蔵の墨とさつまこ

あつまこを枝かきさけあつまこ

あつまこ考やこし食の家もの

小庭にうやまつまこ

あつまこをさつまこ

枝のよとさつまこ

あつまこのゆとさつまこ

等翁あはさる

わしは松をいふもあはさるは梅の神
百八のうみくまのやうなうた
進上平園のあはさるやうなうた
あつさりし風をいふもあはさる梅
梅をいふもあはさる

不曲集

あはさるは目あはさる梅の白ひ
腕押のうたあはさる梅の白ひ

三日月の命あはさる梅の白ひ

元禄十四年二月廿五日聖廟八百齡御年

忌於亀戸法社詩歌連俳令真行一坐

梅松やあはさる梅の白ひ

第木のあはさる梅の白ひ

和心水推敲之句

たぐくめあはさる梅の白ひ

白を改名

あはさる梅の白ひ

梅津硯水と云子

あはさる梅の白ひ

急をかれと梅ほくろひぬ大京中

宰府奉納

守書あつたをいりし法あり跡を愛

元日と珠冷あぐし人共句を祝之

とつ年

夜光うう免孔つあこや貝の玉

小袖悉きく付めや梅あはれ

仙名を改書夏正う五日よみふり孫ぬ

お様あくと手向のうめ哉拜とく

正

久松肅山亭あり

梅のまうく愛宕の星はうあひ哉

梅津氏の祖又大坂表乃軍功あり

帝感状清太刀を以て戴せし正月十七

日の朝とく上杉輝頂賀木の家臣十七

と地元の風おほくくも正月十七日鏡

田の興けあり其栗家督執権とく

ひまは賀會あり

幅持我々其至服やう免孔とく

宿世のめ擬いりまありまうりし

芭蕉翁百ヶ日懷舊

墨のうら先書やむらゝしん昔うま
氷肌玉骨うらや

草花しみし書うらも春にも梅乳皮
うらやのふを逆りうらうらうら
雪うらうらうらうらうらうら
芭蕉翁をよむ

字うら書や十日もよおすのうら
あうらうらうら

雪花子うらうらうらうらうら
五七

字うら書や十日もよおすのうら
うらうらうらうらうらうら
雪花子うらうらうらうらうら

市開

雪うら書や十日もよおすのうら
うらうらうらうらうらうら

茶臼子うらうらうらうら

雪うら書や十日もよおすのうら
うらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうら

管うねり 笛あきあき 無鼈
うねりや 春の海をうら 礼を
うねりや 春の海をうら 礼を

柳上鷺の景

さうらり子 鷺の影 柳の葉
まうらり子 鷺の影 柳の葉
柳の葉 鷺の影 柳の葉

傾城の讚

青柳乃 柳也 三り 柳月

青柳乃 柳幅 柳の葉
柳の葉 柳の葉 柳の葉
柳の葉 柳の葉 柳の葉

山更上京

貫山 柳の葉 柳の葉
柳の葉 柳の葉 柳の葉
柳の葉 柳の葉 柳の葉

柳の葉 柳の葉 柳の葉

芭蕉の自画十三懐周之讚

柳の葉 柳の葉 柳の葉

正月巳巳布施願財天詣修奉納

玉桂 登しつゝくや 帝徳より

糸魚 如 漁 舞 園 可 八 ありあのら

志 急 の 曾 可 阿 の 糸 雪 蒼 糸

白魚 露 命

月 と 住 束 生 雪 魚 龍 腕 謝

志 急 の 曾 可 阿 の 糸 雪 蒼 糸

白 魚 の 徳 可 阿 の 糸 雪 蒼 糸

水 何 可 阿 の 糸 雪 蒼 糸

水 の 糸 雪 蒼 糸

一升ハ、のりま 海より 規あり

不却ハ、のりま 海より 規あり

海より 小磯 糸 雪 蒼 糸

四睡圖

かきろろろ子 藤くも 靴くも 鹿の耳

鼻より ありあの目 鏡や ありあの月

點印 半面 美人の 字を 彫て 琴形の

中身 備ふる 糸 雪 蒼 糸

万句 糸 雪 蒼 糸

善代月 琴糸 おろくろく 糸 雪 蒼 糸

おむねくも松中い思ひこ子月おうか
二月十七日原驛

軍士の臆都乃大夫 見えく巻ん

沾徒岩塚子逗留しく錢おれ

白ちのいと恨りく嘆けりし子

松島や志月か思ひも此は心く

不二の娘よのそまればり

三帆舟ハ塔尻舟おれかき矢式

みの海舟のるるはり

糸と色の蚕やしちよ日向の南

上十

もろさめや桑の香子酔ふは尾張
春雨やひしれまのみを枯つし
綱く去く廻り鳴るるあこの那
この雨身あつるあらん日次り

本多総持云ぬ

妻のおおき津の報せん 多しとあり

遠遊酔帰のかるおろちり

と家およる女とく 家およる女

三河小酒井村祝言奉納
ぬきと輪や 舞もあけ 春日 朝

伶人忠門を以てしや。忠の忠
悼後立志 初志を女に
昔のなまを川音三井も後の志
了のへく世をともこのま春の約

画蹟

浦島、たゞりの暮の 鶴のあ
たのあしや大神を人のつら
鳥鶴やてを海にこめて種下し
を子あらし 俵牙の守小橋の船
苗代や 壁をいばけの取つてひ

正
十

格枝繪る合子

あゝ 斯冬虫 あゝ 稲荷山

禁固ヲ破りく暇と玉ハル

破や又みく以銀銭又みく
やあ入やそれと、いふも此是ハ星
敷いりや一ツをあさるうらや美
やあゆりやまや以年をなつて
局入や牛合急しく大原戸て
故未穂主浅野少府監長矩之舊臣
大石内蔵之助等四十六人同志異体報

亡君之讎今茲二月四日官裁下令
一時伏刃齋屍万世のさへはり黄舌
我ひるものし肺肝とつゝめく

画讚

拾得の風中より玉帛
うら志や江戸をたれまぬ風中
支考々遠遊のあゝ海ききしるを
きりるん

白河の関子又入道ののの

惜春

梅ららやあまを箕子せん風巾
まへへりて代はすらん雪の如
歎饒力の後迄鄙の居返回之

一松手あ子を送る人平

わらわらや雪れあ水 十しとを
杉起き 畠茂みきとふ 雪るる哉
御芽さうし 出山ち身あそひ畠中の
梅のほつゝ子六分斗なる嘘乃のを
又つゝる野の草莖ちるせし折る傳る

子莖ををつゝ、
 是あきして不二とて、
 足あも我つまう猫や
 猫み子のくんのり
 近隣急京町
 寄所、
 幼、
 寄寺、
 思他、
 疑、

人子胡椒の粉を
 再婚つゝ、
 自得
 能睡
 能忘
 能捕

能狂 能此のあふめをさし給ひし心
能耽 能此のあふめをさし給ひし心

吉原の初午

とつうまや 賽銭とくくさきみ
はの午子さる力原りの候をさるりの
は子進り祝祭いしん
いの子さるり祝祭いしん

金納

金納 や冬青子あくすも稲荷山
爰子さるはる水間寺

あ忌

人の世やあくすある日の寺をやし
とくしあくすある日の寺をやし

授記品無有魔事

くわいしあふくく 彼岸乃夕日親
不生不滅のくくを

海棠の斬を悟進 好もん像

西仏若く大晦日子入滅しあつてい子仏

たあみと 往生もあのをあみあ

佛とくささくしれさ子月本の那

二月十五日 上京發足

西行悲死出踏を揺めさく先代
寒食や電下牙猫乃目と怪む
今あるまゝに家食の家六自所番
餅配り國拙人こまめ奏してさ
野老賣了急大原の里ひくさ
さめ草の重しふくさり野老賣
物とめくせえれ僧牙路のたう
う先さや此一さち成ふまのささう

舟の香や柳とささるま 廿路の棠

菜苑

黒竹麻くく成あぬり去草
すこくも摘やつらんやほくし
野の角の志をささるらん土筆
匠龜の腕しかりんささるひ
山里せんふもなるほしや作猫活
の南於年あさるさ
傘や 蘇東 東の 阿事さる
ゆめささるさく何成するさる

見獅子伶有威

了ふ志ふ獅子多獸志思くし
百とせ、ねる、業能志るふり

無車馬喧

夕日熱 刺す、り、さふ 於 蜂 采 卵
蟻 しくや 蜂 ともひとむ 糸 産 卵
業 屑 糸 老 故 こと 長 志 する あり

萩菜

聖堂よりこゝめく 蟻 志 いた の や 成
花 子 也 あり 蟻 子の 無 此 萩

山にちち乙多をとり入日かな

画讃

燕 やり 海 支 巢 成 曳 いら あり
かゝる あり 樹 の さうり 妙 是 蟻
川 蟻 織 する 糸 戸 と 見 ぬ 成

柳燕の図

乙多の 茶 せう ころ あり 柳 の 那
海 舟 あり 虹 成 あり あり 燕 の 志
茶 の 水 あり 茶 志 あり あり 墨 つく 免
此 子 あり あり あり あり 乙 鳥 采 糸

帰る雁来ついでも古のやあり
小田の一寸 歎きもさうらふ
市川七牛 追善一子九条の
ついでに

塗をぬき父ハあつゝ如雉子の色
世の中を何の法もいふは
うらみしに 鶴のく雉子の距の苗

角田川
なれも其子と尋ふ 雉子の
大らきし 雉子のく雉子のく

帆は 花のせいさうりあろすを
魁也 花のせいさうりあろすを

市川後舟

川上を 桃や 舞妓の 腕踊り
体子 桃李の 詩人 舞妓の
菓子盆 人形 花を
緑豆の 志 花乃 眉
燕 志

阿婆のやせこま年 梔花の雞乃志
鶴の獅子のほくくく 逆毛式
順神のくく子とまむや鶴あはを
勝是をひくくく 舞の法水う那
炭の食のまにまむねむひひ式
毛くくまふ版思くくを雪くく
老くくむふくくく やまぬ固本冊
刻く入くくく 花冠も其手あま
王子曲水のりくくく
天香成鳥帽子子ふません出くく

曲水年阿のま遠ま茶碗のま
まぬ如 算まくとく 宿あくく
おあくく本兔も阿り 離まま
あつくまの神まの向まとおの離
あまほやひ那年對まくく小 盃
みくみくや盗戸ぬまなハ松浦舟
上をくく 離まむくくこの 秋なり
傳へ来くくひまのたくくや 延喜 錢
三月四日雪ふりまふ子
離やま此佐野のくくくあまの袖

紙離のさうくしきとちまきとの
孫とくくむひりたりけき白
とち子孫はま宮版ノし赤浦りく
いりうしみのやた
そりい連子あはからん輝ひ子
離ゆるも其盤子たはしまるけ
折菓子や井筒糸ありく離のたを
くり云とひなも何い連め鹿の母
後此いれは水坂を一目 鳥那
ひまこれぬ人をさるきの棧み

一
九

永代島八幡宮奉納

汐子也たつ子くまの連 次新貝
親みむ比目を臨ん汐子これ
紀国の朝釣つれく志海ひの船
貝つらや 白洲志未能あう連松
魚あつらやうのき上へ水の栗
わきうくと雀はさくめ加うと貝
貝めく貝とむきつら
何さる貝むほの紐うきあぬ
海まらさや浪能のきさるやの貝

菰得や塩漬りもさる好くさ貝
寸たき貝雲のう候みく人々
子安貝二見形浦を土産酒式
貝を漁人を送る積し子
蛤の志のもささむの半さ木
鉄槌牙の乳の〜 羸螺のかけ
のささ 且那の〜 夕下ひ
東潮留見見
出代や人おくを給も連衆あり
傀儡師阿波の鳴戸を小うさ哉

伊勢の毛付を道傳
る糸繫子哉まの門や 傀儡師
西諸公の海牙
森崎分子まの〜んむ月もつ様
皆足代也 鑑り乃とれ和ささ
一草を礎上いし招き進
もろ樞天物形のひさみみきん
いさけ〜小町り婿のみをさ
猿の〜酒をさめ〜 櫻の那
系中へ地金のさ〜と飛去る

仁和寺

いさあつるの居り木ありし櫻あり
ハツ過せん山花さくさく如一沈之

雨後

さくさく生る生る日ちわきれま
はくさく梅さくさく目もあはれさくさく

妙鏡坊より花送し遣し

文ハあはれ梅ありし使あり

上野清水堂あり

隣りけく志あり由 書此さくさく

折子殺生偷盗あり

阿も也と志尔五戒其さくさく
志道ハくしとさありて其由はくさく

上野あり

浮助や 麴徒又子ゆく 櫻 寺

芳野山ふりして

明星やさくさく梅さくさく山あり
口ひあはれ魚あり汲り梅をらる

大悲心院の花と又梅あり

灌頂堂 園あり梅あり 櫻あり

酒花さあれ子橋をたけなむ入牙
下外牙漬味えせと志ぬさく此
墨染子朝彼はくさいつかこちん
身成ひ子縁ありきる系はく
浦人の花咲りらめく
ちる時と中子買ん様さくさ

花中尋友

鑄改人ときさくさく山はくさ
山さくさく鏡あしと僧あん
やまはくさく猿はくさく猿はくさ

石河氏直雨云山莊あく
二とさくさく角さくさくさく
ひまの子さくさく繪持さくさく
目黒松隣あくさく

浮世未だ林下さくさくさく
小坊さくさく松さくさくさく
去るの車にさくさくさく
卒未の本上那さくさく
さくさくさくさく
其の生さく二日あく山さくさく

會秀亭の芝植とてふあや

植尼子三切の供也 山を九る

勢多春望

山はくくく身を泣くく乃換子式
尤ありひ子此喚鐘とやま 極
萬日の大世ちりともふ 連さく
一食千金ともや

此の世乃何五あをぬはくく朝
友猿めしとをさくひきてな世とも
縁うくハ志あふ行のあぬを能く遊

沼坊や花能くのけまくあまあり

行露公あくくく一由露亭のし

照息子あたむをれし止流あ那

草々もくはくくくあらん影あれ

會秀亭能くあくくは供くして

は近習や花の志れくまかんとあ

屯ひく山たりやあお乳の手出し式

地うくひや志のありく松くあり

讀莊子

波是ハ嵐雪の偽 為れく地

門柳花を挿ふ折ふし
 花見式 毎牙つれり
 護国寺子河を討つるに
 大佛膝 くのりらん
 世の花は五年 己の郵表
 懐色蕉菴
 月急や 修徳の寺社 残るあり

上 廿四

傀儡若鼓 ぐりやが
 森よにまを捧つて
 花子 遂に親達よりん 都
 立君をとりまむ
 されありく 金よ中人を
 傳利狂人 けりしや
 人をも人を急めさるや
 花見 花見

日輪寺の僧と對興

花を酒傍やも日輪寺の僧
花ハ都を此くく友をあうり
かんさしやあやうく茶のありにも

上野寺

わたり使士人きく後のおん代
酒を妻つま我妻をくみえんれ

妓子万の命を供へく

その為子何くもあうりや小盞
花子来く於き幕のあうり哉

兼代推

彫笛縫の兼花年晴を浮せうれ
車牙くきんをみくや東屋

尋花

植木屋此亭主為を之をいさ
あのかくと花のなれや 扇
湖春波のくして

泣くも短尺もあり花を
南盛より先く上京子

花を濃伊勢を志人く裏移

名きこのりや 作^{タテ} 急五郎 花定め
行露公年々 蒼をぬるころく 逢うゆれ
郵政のん使者のおる月を我
そね下けく やりくかひより 寺あり
花子 鐘おここのちへ 喧嘩 買
容すきこや あり 後をむす 浮きま

櫻島

花風や 天女 負進く よあころり
宰府兼詣の舟中
其来のそれの小坊 主り 角ちりり 危

海棠のむらさき いろは ぬる月
山吹 黄玉 青玉 舞をうま

三月正當二十日

やうぬきも 柳乃糸 結くみか
月雪 牙山吹 花のまゝ 歌ほし

浅草川道遙

鯉の美ハ山ふきの ぬやま ぬき
小舟 舟を糸ち乃 糸つりし山
こゝ 糸ちあき 糸 糸 糸 糸 糸 糸
且夕のほく おそく 糸 糸 糸 糸

亦是らり本屋一見せん法々しく成
きり志事牙豆腐と切く捨たるを
業舟の里ハ茶搦せん水きり
ふ花と酢みそ子つゝふ雪下の那

画賛

友みあふまのままに歌いし世あり
ふら笑く松魚らふ日とかそへん
水氣や鮓こころふぬぬわりの柳
錦あもを 為志風ハ憎かしく
とと子みをとの五徳やあきら凡家

上 廿八

秋航庭をきせし子

たそのまきや花うきくはく扇を
こらけ二唄と侍遊より京使子
そをちふみ祝しく

浪や 廿七人 子腹とを

うらうら二かき何啼けの星乃教
ちんけん引蝦子そあふたのこり

市喧

つき本屋のまをうまぬく雨蛙
景改り片目成るふ田螺あ那

あり人の子の心をきりぬく
 ころりやまらふ子なり蜂之助
 何れ蜂の巢かきし子
 ならふけのころり三八宿とこそ
 何必逃杯走似雲
 何れ汝たれこころ遊も若少梨也
 龍樹菩薩の禅陀伽王に對して貪
 欲を志ぬしあまり事なく人ぞ有瘡
 人迹猛煙始雖悦後増苦の文の心を
 存瘡のいひぬれ時えし一清法を乳

上 卅九

摩訶止觀の一日之羅維不能得鳥得鳥
 之羅唯是一日けふのころり汝也
 多きをり急けしころり乃ち久哉
 南村千調仙者へ如魚の子
 けし如猪口を破る鳥つを純具
 三月尽
 孝ふあ繁く春法送れ牙公重や

摩訶止觀

夏之部

凡光前我若吟身

大酒前あきいそむけき裕あふ
一とらう子裕子あふや思ふらう
越後屋尔 绍きくきや 更志
卯月、月母子あふ世

身あふりき衣あふき 卯ら世
ぬあふや子あふ親きこ返あふ
は神も志あふの下あふ如 更衣

寮坊主のりねと淋し 郭公

宰府奉納

中々記する居くと越尔らり

林中不賣薪

せ子なくや山ゆききた町られ
禁寺 五加、おく世あふきあ
さら江とらふ村あふ

らぬ山林場の日蔭や子規
曲終人不見

あふ川あふの反吐とらぬり、杜宇

たれとけききるたしみる曉
 子も来り母はのるをまじり影に
 ねくくん家や嵐子にうれん
 子もふす枕もぬまに 蜀 毫
 担風の妻を供へて契ぬ一はとく
 るの間妹とひうへせほとく
 又采急りて
 蛤中在やの種多り如子親
 それよりいへぬ馬や時
 懸滴我祝子来とほくきん

入間の四月示ぬまれなりとす
 あり人死絶子もねくやとす
 月夜に腰ぬき風呂や子親
 六段糸路のけくちん 鶴
 樹子と樹下
 出つる地銀杏示るる影に
 子親串く有明の 暮らつ好落
 ねくくん大張張走子孫好あは

目の上牙目をかく人や敦公

夢登

砂を目子寐え成阿人 昌魂

姉崎の野夫忠孝心をきこ

めされと縁をあらりておろく

起るきけあの時多 市之忠記

あつとす二あめりハ出馬これ

寺を守りぬ 寺子鬼あり子親

山田市之患

ちのくし海を流るる 杜宇

親きく耳と初て得るきん

我白大志の成と時をのハ 能

証かんく 難破時多 寺子戸子

海連くしと難あつて子親

明くしと啼きくしと急を

敷公 中入あつて此 とも成り飛

さもくとも木鬼り人 時 鳥

次方めく 母く成をきくも 難あつて浦中記

屏風子菘房の位す山家の系
送ひ子此之位をあり 郭公
子能居や大才神考を隠者鳥
上行寺 二句
灌佛や拾子別 古の兒
信仏や墓子起るるをり云
佛々人このをるるはくくく
志くくやくく生れ出きん
麦飯や母才たうせく仏生云
神の志やいつ達の市所乃加茂詣

う乃花や蛸くく山志乃乃乃
蟾とふんく東神の志を悟りく
年多くくくく此物浮け
舟高乃均くくを吹や夕 若紫
慈母墓
系水才くくくく茂果那
僧正能考くくくく楓
心かくくく乃くく牡丹持
河州観心寺
楠の 鑑ぬら進くくほさん哉

うかき女也 異見子 洞む 夕牡丹
筑新江と

志々ぬ火也 鏡了うつ牡丹乳

丹羽虎京かゝのとの糸糸を

黒牡丹紗也 ねり世の大鳥毛

艶七子め々

八專茂うつて 可笑牡丹可重

あさめや 驪山を名め 深見子

肖柏の行状とあつて 集編る人牙

はくし 角子火を免す 深見 艸

殿つくり 並々 桐花を非

紅毛 貢乃品 奇遊り

桐の系 新後の 鷲鷲をの

そ 日子かき 浮瑠璃 扇也 青

下谷 郊月の中乃 一日

隠岐 度のか ぬり 鏡

帆を あり 舟 松魚 磯か

鏡 花 巴日 の 草 舟

夕 志 中 舟 舟 舟

こ 舟 舟 舟 舟

和重飾子

伊勢みこも 松魚なるも 酒迎

にのこぬまのこゝろ

うゝゝ藤の葉子みくも 鯉なるも

あはれの卵も中死ぬらぬ

人のまゝくはれ新しなかつを

魚市涼霄

揚きぬの夜も活ぬ松魚

光廣卿のあそびの合作り

松魚なる先まぬ名を袖く拭

木質

名所は海にんましく 松魚那

袖裏や茹くをけず 白く李

浅野忠義士名を

涙濡れ鏡を引たり 雲つら

杜のあそび人 水も 古曲まで

あまのつらさ 女雪結をかく

ひんがしの味もありけり 杜の

屋まのけり子 提来ぬらつら

護国寺系海

水漬子ちりこころぬと 杜若

奉納

のう衣は乳やかきこゝあきんじ
あしは志報精進の洞きこま
さぬさうく風をたのけしきりのま
芥子のくけむらう臨きん頂海いん

祝産育

たううまの皮子豚の乳つこころ
筆よ赤きりおくは犬あき
筆や丈山あしせん鏡の鞘

正三

大町亭法會

法のくぬ筍羹皿由 加ここ 式
寄幻半長老

老僧せん 筍 ともむ ちあみこ式
ころの赤や 鞭牙わらぬる 相根山
志あひのころ 法隊の 梅下くろく

く免いん 阿彌伽の 杉まぬま 玉あくれ
傾城せん 友をるしや ありの 宿
帯合相あるしや 浮世 夏とをん
みくあや 終日ま川るの 絨唇の 声

岩翁亭歌送蟹

く〜く〜と隣へ〜と〜と〜と蟹の足
好志〜好志〜と毛指〜鳥麦
馬士起〜と〜と〜と〜と
麦子かあ〜と〜と〜と〜と
能化堂 麦〜と〜と〜と〜と
聖子麦 津尔 年と笑〜と〜と
田家
子乙女子 足〜と〜と〜と〜と
汁 鰻〜と〜と〜と〜と 早苗〜と〜と

五
五

木質入湯の二派

志所〜と〜と子苗〜と〜と〜と
田植あ〜と〜と水菜屋〜と〜と
台所〜と〜と友〜と〜と〜と
早乙女〜と〜と〜と〜と
招 御 子 苗 穂 子 出 秋 々 々

佃農

鏡 漁 の 脊 中 亦 あ つ し 田 子 取
織 網 伸 け り 帆 舟 走 船
之 舟 級 乃 織 甲 也 庫 の う ち

屋根あきしあらんく昔る 高う形
糝うん 彈ひそめき 終のあり
ちまのめふとらん 世の繁ふ繁
おろきる女乃 塔は入て文うし
山無の糝やも先く 偏なく
くらの戸や 山のて 子入のひ糝
午の逢午の日 午の日のけい入
競馬 塔入 入力死いさうく
いりりひま ちりる ちりり
さうさ 彼のり名もこころをよ 節白前

五月雨ふやのく 吉野を 出ぬ
三話や 藤衣うく む ぬらう
隅に 草と 花うく ねん 五月雨
さみ ちや 是あも ちん 通う人
燕も ちりく 急ぬ ちりき
新あ ちよ 田子 けり ちり月
呈 西 踏 江 ち 銭
第 木 や 人 馬 ちり 五月雨
住 屋 ち ち ち 川 の ち 五月

ち 江 戸 ち 系

此の如くや海の瀬ふ山ふりあり
 五月の雨の如くはつれも
 又も西やあつたつれ 小人形
 さみくれや酒匂くくする 神歌子
 巖宿院の大法師をねとまは
 五月の雨の如くはつれも
 七十條の老醫酒匂まうりく
 こそのくはつれも
 こそのくはつれも
 こそのくはつれも
 こそのくはつれも

古く古来稀なる年になつた
 こそのくはつれも
 六月の雨の如くはつれも

水の鳴

微雨の窟を度一曲
 何れもさうすやんあつた
 霧坂や言はれぬ
 舟の尻を打つ
 下野や 壺根性乃

腰越

篠すのまゝ 厨斗と 雲のぬらふ

傾廓

ハ云 志也 虎の 雨
けふの山に 何を 閑古る
風あふぬ 表也 志のくや 如き

僧正、谷

侘し けふ 具如く 学よ かん

自愧

抱あふまを 母孫さるる 水雞代

あゝ 鶏啼 表も 不遊 けふの つ

和古詩

琴瑟 饒く 水雞を 煮夜 酒淋し

吐ぬ 鶉の ほむ けふの ぬれ 舞一那

務身 つれて 一里ハ 表こり 思の 松

不 燈心 竜や 子 流 ぬく けふの 式

杜園 致 以 心 む

羽 ぬ ぬらふ 時 志 けふの けふの 時

あゝ 人 けふの 時 志 けふの

内川 けふの けふの 葉子 ぬく 蛙

新白子七里を歩くは山本屋館
石の枕子館ありと云ふ所の茶を
永代島の茶店子やあつて
明るる神崎とて建く館の蓋
湖舟幾千酒にうへて
貫之の館のすしうふわりの乳
飯館乃鯉なるほしあみやこ代
岩根こそ鞋千鱒あり 走鯉
あつてとて通るに
それ中込志しんあしう小鯉賣

更し海と四ッ手糸の光う那
目通りの園せん扱や 築おとあひ
友川千藤とら仕出とて養子式
枇杷の葉やそれと角あきの蛇牛
辛くぬ 兔の耳やあつてふ
うはあり 酒乃さつれ子 這をうり
鎌倉やむし 虫角能 蝸牛
文七千姉まゐる子危のうらり
半は先とや糸糸生る 蛇牛
字の戸子糸糸を斐多くふ 堂うれ

宇治めく二句

紫の舟よりあつれてさうなれ
川くさや水子二重にほく
臺志のこゝろのあつれに
妾のあつれこゝろの小舟告やらん

二まのうし

此碑てハ江波哀まぬ
坂はくらす子まは浮橋のこゝろ

愛娘子

鶴啼く玉子をよ坂をたぐり危

鳥山へおもむく人子

青柳のほろむくあつれ蚊はか
市は佐屋のいよきれ子

昔つくりき果う川をさの坂やり
萩のやきん紙帳牙風をいふ

後讀書

坂をさうの枕り
松賀秋帆山岩峰へ題り

あつれ火子狭箱あつれ
蚊を火子夕白志らし橙

酔く忘

宵の蚊も枕をりくゝぬ 八あうれ
生死未未

鳥の蚊も心くゝり 夢のこゝ

捕虎 東坡

七ツ毛の蚊も心くゝり 足疾鬼
のやり矢や蚊帳つゝこゝは老ひり
蚊はやくや塵衣ぬ 困る 秘終

佛骨表

志つゝくゝり 蠅とあきり 韓退之

射者中 奕者勝

蠅 打よつゝ連ふあ 宿題くゝ

伝信の末あゝゝゝ人死 終り

梁の蠅 汝おゝゝゝ 一ものゝ

蠅 なくゝゝ 一茶をゝん 昔の菊

去るゝ人 汝をゝゝゝ 日あも

蠅 追ふ身 妹をゝれぬや 瓜作り

西雀の矢 數能諧 後見たのゝ

蠅 汝あゝゝ 二万の此 蠅あゝゝ

不二の 蠅の 酒を子のゝり 鬼

逐歐陽公賦

蠅の子孫兄子舜あはさ悟る哉

のまけはたうちをぬきくさるる

きく統るのまをばくしる蚕の糸

取きつものりきりかまひ登入能なり

縁槐高處

さ川蟬や 笛平 帝法十文字

一晶の宿坊あり

日蓮よ 木すゑ系 蟬の鳴を記す

空蟬子 吉原ともか 訴詔あり

木戸書とあつてむ

蟬をきけ 一口鳴く あまの

入湯の人本契法ありし

蟬のあまし 蟬もあつて

をくぬや 木の回りあつて

あ打や 蟬も 花をぬく

銀子を懐紙の表帟ありて

あせせられ

飯糰子かきも たつぬ 蟬の志

視波蟬 多負者 平衣をぬく

隣りへ此木めくむ如替え能事
舟の掣さる能事志不れた時も何り
蝙蝠子守治のしりしや一りのを
あかりの物あらしりねね色くれ
うりもこの弦子

夏虫の句をさうりく
宗長の句をさうりく

たち虫乃知らるる何れも
世の白ふむえん実えん陳皮さ
と文代の善書等の神やと何 柏

正 四十七

夏木立式池上の破風五寸

建長寺無詩俗人

夏木詩ありあけ何れあり夏木立

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

夏木立の溜池のさるる何れ免く涼を挽

日待發ちけくまを遊ちるは
ひかり燈火をこころをささぐ

いりの下におけひかり花
雪子入る月や志はりし不二の山

浅草川道遠

富士めや細代ふ火あまの
あゝ雪をふりてまゝに
と絶く又くまりた 不二日記
水もや里蕙の繁志は 日記雪子
るそや梅甚るるこゝ 河通を

上 四十六

了舟の讀

五子舟 膺くかこことそへ入る

楓子居

あつた屋や家吾かくまへて
麻村や 家残へりし水くま
三葉よりかこおの毛の依世の
とを知く点ねありて
中をささぐりぬを花のあくる
あまのれ非人きくあゝ 麻蓬
落の甚るるありあを能く 深草

百合の花をくまぬさね子うつなきね
蟪蛄の小野くまいさく車百合
ふり買や月入くまを夕日乳

望相良

をらん子あはくはあり日思ふ
ひさしねや梅の糸目子たう程の
ふあをとる高年くま川 價う那

祐天和尚子ヤサ

夕白く年あはくまきとかきと賣名号
ゆあねやふまの雞 垣根くま

画子影守

夕あねや一白のとあ あれ宿

酒満

昔あまの酒典きき子も二面

藤のむや金魚年あねいふ藤

遊女小笠とく勢て讃あまあれし

もれくねや弦子あはけくまあ

藤のあや海老越と袖くまあ

茂叔賛

傘年蝶 蓮あは系子 蟪蛄う那

詞書畧

香一炉 蓮尔 跡を 色にけり

得正觀世音像ヲ

手ノ牙 蓮 膠子 志戸 ぬ 白ひる 那

妙法蓮華經

たへちりのや 法のもも寸の華 經ニ

蓮華を法門は法花の華受りていへ

とを庐山の文をゆるりありたりとて

玉阿くして 爰て 筆くき 白蓮社

江坊 新えん 多此 蓮 の 子

上 九



靈夢 感して 東湖 無也 天子 詣信

出ぬ 葉を 子 欺く 多て ても ち あり

荷切や 下子 ぬし 切く 茎を 角

蕪くく ち 蓮 有 法 子 新 あり ち

漁童 孔 香 尔 於 乃 あり ち や 初 鹿 山

菟 有 裁

海松 和 布 ち ち 雲 の 腰 ち 蓑 青 角 豆

みく 此 多 ち け ち ち あり ち 磯 訓 松

漁童 ち の 演 出 ち

彼 香 ち ち ち 貝 ち ち ち 出 ぬ ち 漁 童 ち ち ち

瓜の一花

この女は子誰あやまの川く 瓜持系
あつらひし器は茶乃とくり 瓜の好
あつらひし 硝子なりけり六皮す
おれ日や又 泣かぬ 志も柔らり
あつらひし 瓜の志つらり
瓜の皮もえくもて牙 流連たり
活むるも 瓜買ひゆく 袖も丸
龜毛子銭
うりの皮も立身、重しとかさきき撃

冠のやうなる法はさくらあつらひし
その紐はさくらあつらひし 瓜持系
のりやうり 瓜の志つらり
あつらひし 食養生ゆ 瓜の好
瓜の好 桂乃生油 瓜の好
干 瓜の好 瓜の好 瓜の好
瓜の好 瓜の好 瓜の好

豊年

あつらひし 瓜の好
瓜の好 瓜の好 瓜の好
瓜の好 瓜の好 瓜の好
瓜の好 瓜の好 瓜の好

市東の汗

虫を巻く朽木は小町にまらり
新衣はまらりあつたあつた
法のおもひれしき臺の山屈か子
宗麻のりやと情多しり父のまらり
送りまのやあつたあつたあつた
生れねいのやあつたあつたあつた
死の海を汗あつたあつたあつた
款仙貫之の古昼子
冠を巻く指紋まらりあつたあつた

五
中

汗濃さ子衣は背縫のゆわくあつた
灸を巻くゆわくあつたあつたあつた
ふるや内儀たましくお清り
市中白雨あつたあつたあつた

鷲を巻く夕あつたあつたあつた
夕たちあつたあつたあつたあつた
白雨あつたあつたあつたあつた
雨を巻くあつたあつたあつたあつた
夕まや田を巻くあつたあつたあつた
ゆわくあつたあつたあつたあつた

舟中望

さくらよしの筑波崎出く里急を
夕たちやほ舞の巻にむ所を
ゆりしらや洗ひかゝる去せんを
白雨牙独活の系ひる支白う都
夕去やたのゆかむ坂との海へ
海茅の葉子あそびく晴るる
ふるや^い霧らひさきい 子死系
ゆりもや楽を成あふ家徳俱師
夕たらやあそびあそびるる

八雲の川あつ嶮嶮を
橋挽きんこつ海をあそびや雪の峰

高閣挽涼

香藁散火、紅の川く雪の峯
西行と武蔵坊、千尋清水うを
めんあくの端、清のあのを
あつ大あつあつあつあつ
割く蓋とくくくくく
志の川くけ李白、面平かあり
昔はあの子命とけむ清水の舟

元角田川牛田と云ふ事ありけり
いづれか清水をありけり
井子かき清水をありけり
衆あまきよ清水をありけり
雲若法公能真行
日子やけり酒のありけり
世年ありけり
ひよりすむ友子腫せん
清り溜りの判談をありけり
此論を一荷年ありけり

山美哉の清寺の清帳子

波のありけり
紙圍殿のかりをありけり
杉乃葉の青水をありけり
里のれ子をありけり
乳のれ子をありけり
七日
絆のありけり
山玉氏子をありけり
系乃葉のありけり

番付を責むまのりかきやひれ
 松原年田今戸此りや登休を
 瓜むひく程年くふさる所ささ
 甚の繁の赤禪をかく暑一のれ
 加ふくくあく
 少残り歌せん痛の所りさく
 蠟うけの標丁あらし星ハ小
 小女乃常子くくくあつさ
 冠里云備中松山初入の時
 川と暑や浦の昔屋張軸うり

上
五十八

傳九前々持し扇子
 朝比奈の楽屋へ入しあつさ
 むくはぬ乃木紙子さぬ暑うれ
 呈露江云餞
 供りこの朝紙あつさや世老松
 亦暑く一呪り甚の紙く周の紙
 身あつさむ一室羽織も浮さう那
 何と羽織縮緬ハ重く紗を軽
 昼さうのひく
 うく麻あふりはめさる麻乃巾

抱籠やあかきくはのよきよ
曲水の旅宿子湖水をありひ出く
連やあかき表紙にうらや
うきまの風情月身なる恋扇に
紅くうらな乃あかしの白ひく赤

小町の賛

腰あけく休むあかき大団扇

破扇の圖

維光の後架へのあし扇なる
鳥飛 紺衣あかき紅あつさ

あかき粉子風の垣なる扇一の形
あかきあかきあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき

新鳥やあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき
涼風やあかきをあかきあかき

序令はあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき

所見

暮ら家々日星の川急死をんん
翁のりの文能の平示

火山のうううぬあをを涼うれ
夕暮のすしし支風の誓か甫

お年と能して不死の青とこの
此舟牙志うううううううう

布袋の纒
藤さうちを子とも起とを夕納涼
海をううう涼む角ありう鬼尾

浅草川歳々吟涼

世人救舟たのれううう涼う那
何とてえ暮子 浜ぬ糸 緑か子

涼此を安房や上総舟舟まじ
さしとや帆舟船民のちし葉

子入の手は欄干や 橋ととと
すし此や先野あし 燈乃流星

能 舟と子とくうううくすうんん
轉退之捨酒吟あり
酒ああ守舟たううう納涼う那

牛御前

是やいね雨を穿人下さるこ

銭久松肅山

筆をさるん所金やかろまの下涼

人孔子とあそく

涼しくいり寐くはありそれゆあん

画契

大虚すしし布袋の指せんゆく所

日枝子むらひあふ所種を

十八のめ種つらりすく美らね

河原あそく

曉と牛さんそえ 車一の那

この松牙あそく風あり庭涼と

勘あぬ月あそくありし涼と成

人子まこ暑あそくあそくはあそくえ

自棄

たうそあそく物起ひるこ夕すそみ

上下と裸のりあそくあそくこ

解あそくあそくあそく

うあそくあそくあそくあそく甲

とぬむきの一白紙扇子のとる種々
生れ松原のうらささす
本号路く入涼しく交味をたつれり
祇公日次の影をとりぬらる
河美垣 徳利もぬらす侍あり
遠浦の捕鯨船押あがりしこり
樽の下よ入
帆波うろつ鯛をいれさきや蒸した風
夏夜やあつきのこやの 抱抱る
子れ肩しくつとくむし 友 早

青流亡妻をいひて

園女とてこれや此世に夏夜の海
夏夜子 能目志あも小食あり
暮年子ぬくや 六月 郭 乙
菴の留守
すひつゝ人ほことなふ夏の 炭俵
隣家子樹とてく人ありその四時先
故とてささる中とささる
物いづらん 六月 相送うる人
谷本 鬼なるわすれそりし 笛

三子

帝中の光陰はととくにいかにき
秋のうららみから太鼓や 各神々

御教

夏秋は師の宿札をとりて

大雨大風

吹降せし台羽身はよく秋を

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

王
六十一

